

人工股関節置換術を施行した。症例は65歳女性。股関節は屈曲内転位で強直し、膝関節はWindwipe Deformityを呈していた。術後股関節の可動域は屈曲95度、外転25度と改善し、両足底接地による歩行が可能となった。また重心は両下肢中央を通り、両膝関節に対する荷重の偏位が改善され、両膝関節痛も軽快した。

6. Fibrous Dysplasia に起因した大腿骨病的骨折術後に変形治癒をきたした1症例

土屋 敢, 土田豊実, 西須 孝
(千大)
北崎 等 (県立佐原)
亀ヶ谷真琴 (県こども)

Fibrous Dysplasia に起因した大腿骨骨折に対し髓内釘による内固定を施行した後に2.3cmの脚長差と46°の外旋変形を生じた1症例を経験した。

外旋変形に対しては、大腿骨顆上部における45°の回転骨切り術を施行した。

仮骨延長術については、悪性化の可能性があることと、healing indexが高いことから適応外と考えた。

Fibrous Dysplasia における骨折の初回手術に際しては、一般的な回旋変形予防に加え、脚長差を生じないように注意を要するものと考えられた。

7. TKA 後に生じた進行性異所性骨化に対する鏡視下手術の1例

村田 亮, 土田豊実, 太田秀幸
金 泰成, 山中 一, 渡辺英一郎
(千大)

TKA 術後に臨床症状を伴った進行性異所性骨化に対し、鏡視下に切除術を行った1症例を経験した。症例は70歳女性、左変形性膝関節症の診断にてTKAを施行した。術後2週に左膝関節のROM制限、左膝上囊の疼痛、腫脹、発熱が出現し、術後3週のX線にて異所性骨化を確認。術後4週に鏡視下切除術を施行した。骨化部摘出直後からROMは改善、局所症状は消失し、術後6ヶ月現在、再発は見られず経過良好である。

8. 再発を繰り返す骨破壊の著しかった膝関節 diffuse type pigmented villonodular synovitis の1例

宮城 仁, 土田豊実, 太田秀幸
金 泰成, 山中 一, 渡辺英一郎
(千大)
藤塚光慶 (松戸市立)

症例は39歳、女性。前医でdiffuse type PVSの診断の下2度滑膜切除術行われるも、再発し当科紹介と

なった。右膝関節の腫脹、画像上は大腿骨内顆、外顆、脛骨近位端の骨破壊像が認められた。

当科にて右膝前内側、外側、後方より侵入し、total synovectomy、骨内病巣搔爬及び自家骨移植にて関節を温存した。

術後4カ月で再発の徴候無く経過良好である。

9. 前十字靭帯損傷に対する再再手術を行った1治療例

鎌田尊人, 栃木祐樹, 和田佑一
蟹沢 泉, 佐粧孝久, 伊嶋正弘
勝見 明 (千大)

本症例では、前十字靭帯を損傷し、腸脛靭帯、人工靭帯により、2度の再建術を受けたが、再建靭帯不全を生じ、hamstringsを用いたエンドボタン法にて3度目の再建術を当科で施行した。術中採取した人工靭帯は炎症細胞やGiant cellの浸潤などの所見が存在し、靭帯としての成熟は見られなかった。これと併せて、全身的関節弛緩性の存在や、下肢アライメントの不整なども再断裂に関与しているものと推測された。

10. 石灰沈着性腱板炎に対し shock wave が奏功した1症例

山田寛明, 西須 孝, 和田佑一
(千大)
高橋謙二 (国立佐倉)

難治性石灰沈着性腱板炎に対し、shock wave が奏功した1症例を経験した。症例は72歳の女性、罹病期間は12ヶ月間、局所穿刺とステロイド注入無効例である。shock wave による治療を試みたところ照射直後より疼痛が消失し、また可動域の改善も認められた。3週間後にはX線上石灰化は消失した。

11. 腰痛における疼痛反射性筋収縮の実験的研究

平山次郎, 高橋和久, 山縣正庸
(千大)
高橋 弦 (千葉市療育センター)
中島祥夫 (千大・一生理)

椎間関節への侵害刺激に対する反射性筋収縮の空間的分布を検討した。脊髄化したラット8匹の、左L5/6椎間関節に3%カプサイシンを1 μ l投与し、腰部周囲の筋群、腹筋、下肢筋群より筋電図をモニターした。主に刺激側の腰方形筋、両側の腰筋、腹斜筋、対側の傍脊柱筋に反射を認めた。腰筋、腹斜筋の反射は急性腰痛症における腰椎前弯の消失を、刺激側の腰方形筋の反射は、疼痛性側弯を再現しているものと考えられた。